

「ヒトに寄り添うモノ」と 「モノに寄り添うヒト」

日時：2023年5月14日（日）14：30～16：30

対面及びオンライン配信による開催

会場：東洋大学5号館1階5104教室

参加費 無料

申込み URL <https://inseajp-sokaikoen2023.peatix.com>



講師：医学者 富田直秀（京都市立芸術大学客員教授、京都大学名誉教授）

概要：プロフィール：1981年早稲田大学大学院理工学研究科博士課程前期修了。1987年佐賀医科大学医学部医学科卒業（医師国家試験合格）。奈良県立医科大学整形外科学医師、京都大学生体医療工学研究センター助教、京都大学国際融合創造センター創造部門教授、京都大学大学院工学研究科教授などを歴任。2016年、第14回産学官連携功労者表彰「科学技術政策担当大臣賞」受賞。



講師は、ヒトにモノが寄り添うための技術、たとえば有用性、快適性、利便性、安全性といった目標の最適化を行ってきました。近年では、IT(Information Technology)などの知性的な技術の発展によって、触れ合い、愛着、生きる意欲、ANSHINといった感性さえも目標化、最適化されつつあります。講演では、講師が京都市立芸術大学の新生入生たちに交じって体験をさせていただいている内容などをご紹介します、どのようにしてヒトがモノに寄り添えるのか、といった話題を双方向形式で話し合っていきます。

ex. 医療現場では



知性の言葉(苦痛, 安全, 有効性: 定義できる)を使って治療が設計・制御されている。



感性の言葉(つらい, あんしん, なおる: 定義できない)を使った, 人工知能(AI)には難しい感性(≠感性的行為)が専門家に求められている。

焦点

アート視点から見た科学・技術 「質」を実現する日本の方法論「型」

富田 直秀

うろろうする-こだわる身体性 (アート教育)

筆者は、2021年3月に京都大学工学研究科を退職し、4月からは京都市立芸術大学(以後京芸)の学生に交じって、さまざまな経験をさせていただいています。京芸は日本で最も長い歴史を持つ芸術系の大学で、設立当時からアートの視点を工学、産業、社会などに広く貢献させることを基本理念としています。特に、身体を使った造形・創造の経験の中からのごとの本質を発見する「身体性」を重視する教育を徹底している大学でもあります。筆者は、その最も象徴的な授業である「総合基礎実技」を京芸の新生入生たちと一緒に体験する機会に恵まれましたので、そこで受け取った新鮮な感化と教訓をご紹介します。ぜひ読んでほしいと思います。

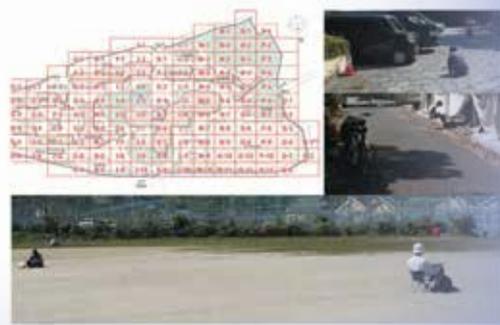


図1 新生入生たちは台所の王国にたがずんで視察を繰り返す。

たり、歴史を観察したりしてその場所の世界観を捉えようとした(図1)。筆者は工学部と医学部の双方の学部を卒業しましたので、これまで理科

す。つまり、頭だけで考えると対立や矛盾である概念が、実際に身体で受け止めると、同じものごとの表・裏の表現として感じられます。また、現場と協働